

日米関係のなかの文学

佐伯 彰一

佐伯 彰一
日米関係のなかの文学

文藝春秋

著者略歴

大正一一年富山県に生まれる。東大英文科を卒業後、ウィスコンシンン大学院で学んだ。都立大、東大を経て現在中央大教授。昭和三十七年にはミシガン大学客員講師として招かれるなど、国際的文化人として活躍中。主な著書に『現代英米小説の問題点』『文学的アメリカ』『日本を考える』『日本人の自伝』『物語芸術論』などがある。

日米関係のなかの文学

昭和五十九年十二月十五日 第一刷

定価 一五〇〇円

著者 佐伯彰さき へい しょう いち

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(〇三)二六五一二二一

印刷 凸版印刷
製本 大口製本

*万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目

次

アメリカの衝撃

7

真珠湾の影

36

戦争反応の水脈

62

敵のイメージ

94

和辻哲郎のアメリカ論

122

知的逆襲のドラマ

151

摩擦の原点

178

ジャップの「憤り」

205

「テキサス無宿」の発想

232

消えるジャップ

256

収容所のなかの日系人

277

死者生者

302

戦いの始まりと終り

326

あとがき

359

装
幀
粟
屋
充

日米関係のなかの文学

アメリカの衝撃

1

これから追いかけてやうとするのは、日米関係のなかの文学というテーマである。

太平洋をはさんだ二つの国の、歴史的、文化的、政治的な相互関係のなかに据えなおしてみるとき、日本文学、またアメリカ文学について、新しく見えてくるものとは、果して何であるのか。その際、おのずと中心をなすのは、日本人にとってのアメリカのイメージ、またアメリカ人にとっての日本のイメージの軌跡であるだろう。太平洋の両岸で、形作られた相互のイメージが、現実の両国関係に、いかに先行し、またその後を追っかけてきたのか。また、イメージが、現実はどう働きかけたものか。いや、イメージが現実を動かすという事態が、果してあり得るのかどうか。実際にそうしたことが起ったといい得るのだろうか。

広い意味における歴史と文学、また現実とイメージのかかわりという問題であり、扱い方によ

っては、途方もない広がりと深さにふくらんでくる。こんな大テーマに、たった一人で、しかもささやかな文芸批評家の分際で挑みかけようというのは、たとえてみれば、はるか彼方まで広がる太平洋の岸辺にひとり立ちつくして、肉眼で数千哩の虚空を凝視し、透視してやろうとするような滑稽さ、空しさをよび起しかねない。

一体歴史のなかで、文学はどんな位置を占めてきたのか。占め得るものなのか。文学的な想像力は、人間の歴史的、現実的な行動と、どうかかわり、つながるのか。かりに文学作品が、現実に対する一つの鏡だとして、その際たんなる反映をこえた、いかなる透視力がはたらき、またいかなる歪み、一方向的切りすて、また拡大をとめないがちであるのか。いや、文学とは、あくまで作者の私的な夢、願望充足の見果てぬ幻想の影であるとするなら、こうした虚像、フィクションは、果していかなる形で現実の諸関係と切り結ぶにいたるのか。フロイト主義者の想定するように、定着された夢、幻想としての文学作品は、ついに補償作用の所産にすぎず、これを受けとり、再生産する読者の側においても、現実でみたされなかった欲望や衝動の束に対する解放、捌け口の役割を果すにとどまるものであるのか。かりに、そうだとしても、そうした深層の、無意識また半意識の衝動群、性的、また心靈的サイキックなエネルギーと、現実の行動とのつながりを、無視することが許されようか。

その意味で、われわれの探求は、見事な文学的なたちに至っていない対象をも、ときに取りこまざるを得ないだろう。少くとも、公認の文学作品のみに視野をかざる訳にはゆかない。既成の文学ジャンルの壁を乗りこえ、つきくずす所へ突きすすむことになるに違いない。

そもそも、われわれの夢、幻想、また文学とはっきり区別された意味での現実、また歴史とは、何であるか。それこそが、見せかけの、贗造の現実であり、いかがわしい半面の歴史ではないの

か。むしろ人間が感情をそなえ、無意識の衝動を内にかかえこんだ生き物であると、はっきり認めるべきではないか。ぼくは、今から十数年前に、「ドラマとしての日米関係」という文章を書いたことがある（『内なるアメリカ、外なるアメリカ』一九七二所収）。ペリー艦隊の江戸湾進入にはじまり、それからほぼ一世紀後の日米戦争への突入、そして降伏、敗戦と引きつづいた両国関係は、離れて眺めわたせば、何者かの手によって仕組まれた壮大なドラマにも似ている。幕末のあの黒船さわぎは、第三者的な視点をとってみるなら、情報不足からくる双方の無知と誤解、またアメリカ側の一方的な恫喝、傲慢と、日本側の周章狼狽ぶり、引きのばし戦法との、あまりに鮮やかな喜劇的な対照をふくめて、オペラ・ブッフアの開幕の雰囲気、物々しく、しかもどこかおどけた序曲にも似ていた。そして、アメリカのイニシャチヴによる開国、維新革命の到来——ただし、両国関係にとって、幸運な偶然というべきか、アメリカ側にも、みずからの「維新」的な内紛が生じ、「市民戦争」という名の南北問題をかかえこむ羽目に立ち至ったために、日本に対する積極的な介入は、さし控えざるを得なかった。しかも、たとえば、初期の札幌農学校における見事な教育的成果のように、ニュー・イングランド出身の清教徒的なアメリカ人たちが目ざましい感化力を発揮した（この新設の北辺のささやかな学校は、内村鑑三、新渡戸稲造、また佐藤昌介、志賀重昂などを相ついで生み出した）上に、これは後年、東海散士・柴四朗が、あざやかにイメージ化してみせたように、イギリスの植民地支配に抵抗し、その「虐政」を物の見事に打ちやぶった「独立自主ノ民」、義勇の士としてのアメリカ人像が、日本人読者の想像力につよく幅広く訴えもしたので。その証拠に、柴の『佳人之奇遇』（一八八五—一九七）は、明治期を通じてのきわめて持ちのよいベストセラーであった。

こうした、潑刺としてめでたい日米関係の第一幕は、日露戦争のさ中、いや終結にいたるまで、

ほぼ危なげなくもちたえることが出来た。日本の戦争能力が息切れしかけた沙どきに、調停役を買って出たのが、アメリカの大統領シオドア・ルーズヴェルトであったという事実も、こうしたほとんど牧歌的な第一幕の気分の中の出来ごとと数えてよい。もちろん、一国の外交政策を、友情や好意という尺度で割り切ろうというのではないが、ルーズヴェルトの講和斡旋の少くとも当初の動機のうち、日本に対する悪意や計算高さを嗅ぎつけることは難しいだろう。ところが、その後の事態は、両国にとってまことに皮肉な方向にすすんだ。ことごとくに軋み^きがめだち、たちまち緊張が高まってゆく。直接のきっかけは、カリフォルニアにおける日本人学童の差別、隔離という純粹に地方的な問題であったし、その際少数の煽動政治家の策謀も大きく働いたけれど、日本人移民に対する暴行、迫害も相ついで起ったばかりか、「日米戦争近し」という予測記事が、アメリカの新聞をにぎわせるに至った。

日露戦争直後という時期の日米戦争！ なにか途方もない空想軍事ロマンスという気がするくらいだが、その手近な文学的な証拠、反映の実例が、なんと永井荷風の『あめりか物語』の中にさえ見つかるのだ。この作品集の中ごろにすえられた短篇『悪友』の冒頭をひらいて見られるといい。

「一時、加州^{カリフォルニア}で日本の学童問題が喧しくな^{やかま}つて来た時分、日米間には戦争が起るだらうと紐育^{ニューヨーク}を初めとして、国内の新聞が様々な臆説を書立てた。その頃には自然、紐育在留の吾々同人間にも寄ると触ると太平洋沿岸に関する談話が多くなつた」という書き出しだが、サンフランシスコで「学童排斥問題」が燃え上ったのが一九〇六年の十月、この短篇が書かれたのが、翌年の六月である。徹底した離脱者、唯美的快樂派の荷風の上にも、日米関係という公的なドラマの影はまぎれもなくのびていたと認めざるを得ない。しかし、さすがに荷風は、すぐづく一節で、物の

見事に、急激な転調をもちこみ、一瞬の逆転劇を演出してみせる。

「或夜、或処で、例の如く、人種論、黄禍論、国際論、ルーズヴェルト人格論から正義人道問題などの真最中、或人が不意と見出した様に、『彼方にや随分、日本の醜業婦が居るさうですね』と飛んでもない事を訊ね出した。処が、それは恰も燃え立つ炎天の端に夕立雲の湧出した如く、忽ち四方に漲つて、堂々たる天下の論議を一変さして了つた。一座の中には以前よりも一層重大な問題が提出されたといふやうに椅子を前に引き進めたものさへあつた」

いかにも手際鮮やかな諷刺と冷嘲の一撃には違ひなかった。短篇の導入部として、機知ゆたかな逆転の効果が十分に發揮されていたばかりでなく、「堂々たる天下の論議」という重々しい勿体ぶりに対して「醜業婦」のゴシップをさつと突きつける不意打ちのショック手法は、語り手の戦略としても、水際立ったものとたたえない訳にゆくまい。

しかし、「日米戦争」は、いささか度のすぎた冗談、事あれかしのジャーナリズムの火遊びにすぎないとしても、日米間における、急激な冷却、第二幕への思いがけぬ暗転は、たしかにこの頃起つていたのである。少くとも、現在からふり返り、長いパースペクチヴに照して見直してみると、この際の微妙な、しかし疑い得ぬ変化が、くつきりと浮び上ってくる。というのは、日米両国が、この頃そろつて、「太平洋国家」となった。日本は、日露戦争の勝利によって「強国」の列に加わり、またアメリカは、ハワイの併合、また対スペイン戦争によるフィリッピン支配を通じて、お互いのテリトリリー、生態学者のいわゆるナワバリが、はつきりと触れ合い、こすれ合うところへ踏みこんだのである。

こうした暗転と猜疑の第二幕は、やがて第一次大戦をはさんで、ワシントン会議の正面切った対決にまで行きつかざるを得なかった。両国ともに軍備拡張への動きは明らかで、いずれこの種

の國際的軍縮交渉は、當然の成行きだったとはいえ、この會議は、日本を日英同盟という重石、また錨からいきなり切り離して、いきなり國際政治の荒海のなかへ押しやり、やがてやみくもに「自主外交」へと突っ走らせる結果をまねいたばかりでなく、この會議の前後、アメリカのジャーナリズムによる日本攻撃は、自制を忘れ度のすぎた荒々しさが目立ったらしい。げんに、この当時アメリカに滞在した詩人・医学者の木下杢太郎、あの溫雅な教養人の典型のような人物までが、こんな感想を書きとめている。「僕は内心アメリカには反感を持つてゐるので（日日読む新聞がさうさせたので、咎は向ふに在る。僕は時時途方もない大發明をして、ヌウ・ヨオク位一瞬間の間に破壊する工夫はないかなどと、汽車の中で空想することもあつた）……」といった具合の、まことに穩かならぬ、いわば現代の過激派じみた「反感」の表白であつたが、これは何も杢太郎が、ヨーロッパ好みの知識人で、アメリカ文化の淺薄さ、安っぽさを小馬鹿にしたというのとは違ふ。彼みずからふれていたように、当時のニューヨークの新聞論調のいやらしさに一切の原因があつた。キューバへ小旅行に出た杢太郎は、ニューヨークを離れた船の上で、早速こう書かずにいられたかつた。「……亜米利加の新聞から離れたことがわたくしを晴晴はれはれさせました。近頃の新聞は、日英同盟に対する批評を終つたあとは、いつも軍備縮小及び極東問題の論評で持切りです。そして誹謗でないまでも、いつもいやがらせの感情が附随してゐます。新聞といふものは全く胆汁の味がします」

アメリカのジャーナリズムは、あの溫厚、慎重な文人学者をさえ、これほどに不快がらせたのである。

じつは、ばく自身、ワシントン會議の翌年に生れ合せたというめぐり合せがあり、そのせいで、この時期に一層身近な関心をそそれるものだが、かりに日米双方の感情曲線を描いてみるな

ら、焦立ちと緊張の第二のピークと認めざるを得ない。じつは六、七年前に「日米の相互イメージ」という題目で、日米の学者十人ほどの共同研究に参加したことがあり、ぼくは「仮想敵としてのアメリカ」の項を受けもち、未来戦読物をさかんに集め、読みあさったものだが、日露戦争直後を皮切りに、この種のセンセーショナルなフィクション、ノン・フィクションの刊行にも、明らかに汐時があり、波がある。一九二〇年前後が、いちじるしい昂揚期をなしていたことは明白であった。その上、アメリカでの日系移民問題はこじれる一方で、一九二四年「排日移民法案」が米議會を通過したとき、わが国のほとんどすべての新聞の論調が一せいにつよい憤激を示し、いくつもの大規模な「排米国民大会」が各地で開かれ、わが国の世論全体がアンチ・アメリカといったもり上りを見せた。いま、数多い実例のうち、ただ一つをあげるにとどめることとして、内村鑑三の発言を引いておく。この年の八月、蘆花徳富健次郎は、日米関係の悪化を懸念して『太平洋を中にして』と題する小著を編んだが、その中で日本が「米国人より離るゝ」ことは、むしろ「神の慧き御摂理」といった奇警な逆説をはいたのが、内村である。しかし、その彼も「今回の米国の日本人排斥は最も嘆すべき事である。……斯くて七十年かゝつて築き上られし日米両国の友誼は一朝にして破壊せられて、今より後、太平洋岸の二大国は敵国とまでは行かずとも、他人国となつて存であらう」と嘆かざるを得なかった。

以来、一九二〇年代、三〇年代を通じて、相互イメージにおける「仮想敵国」化の度合いはつよまる一方で、その頂点、あるいは奈落が、いうまでもなく、四一年の暮れの日米開戦である。この時期をばくは、ドラマの第三幕とよびたい。このグランド・ドラマにおける劇的な頂点が同時にカタストローフ（大破局）と重なり合っている。

「日米関係のなかの文学」が、本書のテーマであると書いたが、もちろんこのドラマの総体を取りこみ、描きこもうというつもりはない。ばくのここで扱いたいのは、むしろ第四幕以降、つまり、戦争におけるわが国の敗北以降の成行きであるが、第三幕までの推移も、いわば描かれざる背景として、たえず念頭にとどめたいのだし、必要に応じて、フラッシュバック、過去への遡及もおりこんでゆくつもりである。また、あえて「文学」という言い方をしたのは、日米双方の文学を、という虫のいい願いを底にひめ抱いているせいだが、もちろん重点は、日本文学の方にすえてゆく。じつの所、日米関係のなかのアメリカ文学というテーマで、すでに十五年前に、小著を書きおろしたことがあった（『文学的アメリカ』一九六七・中公新書）。アメリカの捕鯨船の日本近海への出漁、遊弋、また日本人漁夫の難破、漂流あたりから始めて、相互接触のプロセスを、アメリカ作家を中心に跡づけてみた次第で、本書はおのずとそのコンパニオン・ピースとなっていくだろう。日本文学を中心としながらも、同時代のアメリカ作家側の態度、反応についても、注目、言及を惜しまないつもりである。

すでに半世紀近くをへた長い時間の中への遡行であり、広大な空間への旅である。确实な地図と計器があらかじめ用意されている訳ではなく、むしろパーソナルな「私」の体験と反応を頼りに、このひろい時空の探索行に旅立とうとする。読者よ、ためらいと迷いに満ちた足どりを咎めざらんことを。

2

十九歳の若者が、大学の英文科に入って、アメリカ文学を専攻しようと思いきめた年の暮れに、